The Emperor Jones と *Macbeth*

木　村　俊　夫

天に坐する者笑いたまわん，主かれらを嘲りたまうべし

（詩篇２—５）

O'Neill の作品は全体にわたって彼特有の irony の使用が顕著にみられるが，此所にとりあげる *The Emperor Jones* においては，特に多角的にそれが用いられている．すでに Sophus Keith Winther はこの作品の表題自体にある ironical touch を指摘した（*Eugene O'Neill. A Critical Study* N. Y. 1934. p. 272）．又 Doris V. Falk もこの作品を論じる折に，"The Emperor Brutus Jones (not Caesar, but Brutus)……"（*Eugene O'neill and the Tragic Tension* New Jersey. 1958. p. 66）と書き出しているのもこの表題の皮肉さを意識しての事である．俗物 Brown を偉大な神と呼ぶ（*The Great God Brown* 参照）O'Neill 風が早くも此所に顔を出しているわけである．表題がすでにかくの如くである．作品の内容には更に様々の形をとって irony があらわれている．読者のすぐに気付くような事ばかりであるが，次にそれを列記してみる．

1. 表題に暗示されている如く，この劇は皇帝でもないのに，皇帝であるとみせかけようとした男の劇である．

2. その主人公は黒人であるのに，白人のずるい手口をおぼえこみ，白を憧れ，自らを白としようとした．（拙文 Eugene O'Neill の作品に現れた『白く塗りたる墓』「人文学」第18輯，参照）

3. 外に見せる自己と内なる自己の皮肉な対照が強調されている．この事は場面を森の外（一場及び八場）と森の中（二場より七場まで）にわける事

により，又，時刻を一場の午後おそく，と八場の夜明けにはさんで，二場から七場までを日暮れより午前五時までの闇の中におく事により更に顕著にうかがわれるようになっている．

4. 森ににげこみ，森をつききって逃げおうせるはずの主人公は，逆に森の中に迷いこみ，無駄な迂回をしたばかりで又元の入り口へ戻って来る．前進するつもりであった主人公は少しも前進していなかった．

5. 劇の進行中，勿論時刻はどんどん先へ進んで行くのに，森に迷いこんだ主人公の意識は逆に後退ばかりして行く．

6. 更に皮肉にも，土人どもへのこけおどしにこしらえあげた彼のつくり話「銀の弾丸」の事を，本当に土人どもは信じこみ，実際これをつくって，それで彼をうち殺してしまう．

かくの如く作品全体の構成や，わけても主人公の外見と内側の心理の対照にあらわれる irony はきわめて鮮明である．この作品も O'Neill の好んだ仮面劇的構成をとっているのである．

*

この作品が何からヒントを得てつくられたかについては O'neill 自身が語っている．(Barrett H. Clark. *Eugene O'neill: The Man and His Plays.* N. Y. 1947. p. 72 参照）併しでき上った作品が，別のある作品とどこかで似ている，という事はしばしばある事である．*The Emperor Jones* について云えば，Clara Blackburn はこの作品と August Strindberg の *To Damascus* 及び Georg Kaiser の *From Morn to Midnight* との相似点を指摘した（"Continental Influences on Eugene O'neill's Expressionistic Drama" *American Literature* XIII, 2, May, 1941). 又 Oscar Cargill は *Intellectual America: Ideas on the Merch* (N. Y. 1948) の中で，この作品について語る時 Jack London の *The Call of the Wild* や Rudyard Kipling の *The Man Who Would Be King* を連想している (p. 36). 更に又 Edwin A. Engel は *The Haunted Heroes of Eugene O'Neill* (Cambridge, 1953)

の中でやはり Jack London の *Before Adam* の事をこの作品との関連でのべている (p. 54). 尚又 John Howard Lawson は John Wexley の *The Last Mile* の中にこの劇にあるのと同じ手法を見出している (*Theory and Technique of Playwriting and Screnwriting.* N. Y. 1949 second impression. p. 227). 視点をかえてこの作品を眺めるならば, まだまだいくつか似た作品の名をあげる事はできる. 不遜の野望を果し得なかった者の物語りとしてみれば, *Paradise Lost* とも以通ってはいる. 「悔恨よさらば, 一切の善は吾になし, 悪よわが善となれ」(4巻109—110行) は又そのまま Jones の気持でもあったであろう. 又, うそつきのうそがばれてしまう, という事に筋をしぼってしまえば, Molière の *Tartuffe* とも, さてはわが狂言の柿山伏や荻大名ともこれは似ている事になる. 併しこれから対比しようとする *Macbeth* は右にあげたどの作品にもまして *The Emperor Jones* と似た所が多い.

*

O'Neill が *The Emperor Jones* を書く前から *Macbeth* を知っていた事に問題はない. この作品はとりわけ O'Neill の愛した作品でもあった模様である. (*Theatre Arts Monthly* February 1941 中の "What Shall We Play" への答えとして O'Neill は合計12の作品をあげているが, その内 Shakespeare のものでは *The Tempest* と *Macbeth* がとりあげられている. 因みに *The Tempest* に関しては Bernard Baum," Tempest and Hairy Ape: The Literary Incarnation of Mythos" *Modern Langnage Quarterly* Vol. 14. No. 3. September, 1953 という興味ある論文のある事を付記しておく.)

勿論二つの作品はそれぞれ独立したものであり, 数多くの相異点のある事は当然である. 素材の点に関しては *The Emperor Jones* については作者自ら語った範囲までは明らかであるが, *Macbeth* が何を素材としているかも明らかである. 併し今は素材を問題にしていない. 吾々に残された二つの作品の形の方に関心がある. 以下にその対比を試みよう.

いうまでもなく Jones の罪はすでに劇のはじまる折には犯されてしまっている．しかるに Macbeth は劇の開始後に罪を犯し，そして最後に仆れる．Jones は従って劇の中では自分の過去にばかり苦しめられるのに反し，Macbeth は罪を犯す前にその罪の恐しさを想い，ためらい，そして決行後はその犯した罪のためにはげしく自分の魂を苦しめる．当然 Duncan を殺めるまでの Macbeth の心中に対応する部分は *The Emperor Jones* の中にはない．併しこれ等二つの作品では主人公は共に皇帝乃至王でない者が罪を犯し，偽る事によってその地位を得るのである．尤もこの事は二人の人物が卑俗な人間であったという事ではない．Macbeth はその身分，人柄において，王になる可能性のない人ではなかった．それ故「運で王になれるのなら，何もしなくても，運でなれそうなもの」（一幕三場，143—144行）とふと思うてもみたのである．併しやがて Malcolm が Prince of Cumberland たる事が宣言（一幕四場）されて，Macbeth の心は大きく動いてしまう．Jones が皇帝であるとはおかしい．併し第一場に描写されている彼は，卑俗という言葉のあたえるものとは全く別の印象をあたえる．彼は「背の高い，頑丈なつくりの，元気旺盛な中年の黒人，その目鼻立ちは黒人特有のものであるが，顔には断然傑出した所がある——内にひそむ意志の力，人に尊敬の念をいだかせる，はげしい自負である．その両眼は鋭いずるい智力で生き生きしている．その物腰は抜目なく，疑い深く，捉え難い」．従って両人共に人並以上にすぐれた資質の持主であった事は知っておかねばならない．唯，彼等は不法を敢てした．そして王位にのし上った．併し Macbech の王衣は「借衣」（一幕三場109）で，所詮「小人の泥棒に着せた巨人の衣のように，彼の肩書きもぬげおちて行く」（五幕二場20）のを吾々はみる．Jones が第一場でみせるこけおどしの仰々しい金ピカの服は，彼が森に突入して以後，さけ，やぶれ，遂に彼の身体から全部ぬげてしまう．第六場では彼はもう腰布しかつけていない．そしてゆたかに irony をおりこみ乍ら，この二人の偽王の敗亡のありさまが，吾々の前に

急テンポに展開する.

筆者は *The Emperos Jones* の持つ代表的な irony を白と黒との対比においてみるが，それと同じものは *Macbeth* においては foul と fair の対比においてなされているとみてよいであろう．魔女たちは云う,「きれいはきたない，きたないはきれい」(一幕一場12) と．これをうけて Macbeth も云う，「こんなにきたなくてきよらかな日を私はみた事がない」(一幕三場38) と.

「彼は自分の生命を両断しようと試みた．すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が，却って自分を追掛けて来た．彼の眼は行手を望んだ．併し彼の足は後へ歩きがちであった」これは漱石の「道草」の中の一節(38) である．又，別の所(45) で主人公健三はある青年と語っている内に「フランスのある学者が唱え出した記憶に関する新説」というのを語るのである.

「人が溺れかかったり，又は絶壁から落ちようとする間際に，よく自分の過去全体を一瞬間の記憶として，其頭に描き出す事があるという事実に，この哲学者は一種の解釈を下したのである.

『人間は平生彼等の未来ばかり望んで生きているのに，其未来が咄嗟に起ったある危険のために突然塞がれて，もう己は駄目だと事が極ると，急に眼を転じて過去を振り向くから，そこで凡ての過去の経験が一度に意識に上るのだといふんだね．……』」.

此所でわざわざ「道草」をひきあいに出したのは，ある状態におかれた時人間が共通に持つであろう意識の一般的な型を指摘しておきたかったからである．Jones も Macbeth もこの状態におちこむ．唯それは甚だはげしい，又非常に霊的なものにかかわる危機である．彼等は自分達には許されていない明るい未来につつ走ろうとして，自分の過去をたちきり，自分の「今」をとびこえようとするが，逆にその過去が彼等の前途にたちふさがるのである．彼等の identity は如何にしても変える事が出来ない.

The Emperor Jones では Jones は森の中に突入して行く．この森の中

で Jones は夜中無駄な彷徨を続ける．一方野心にとりつかれた Macbeth は罪の決行の前にこう思った，「どうともなれ，大嵐（the roughest day）でも時はすぎ行く」．そして彼も又やがて闇に，眠る事も叶わぬ長い夜の中入りこんでしまう．*Macbeth* においても闇，夜の印象は圧倒的に強い（一幕三場19，一幕五場51以下，一幕五場61以下，二幕二場 35 以下，二幕四場 6 以下，三幕二場46以下，四幕三場240以下等々参照）．二人は遂にこの森からも嵐の闇からも無事に脱出する事はできない．第一の罪を犯した直後の Macbeth の言葉「わしはもう行くまい，やった事を考えるのはいやだ」は，彼の足がすでに前進をためらい出した事を示しているが，「もうこんなに血の中にはまりこんだのだ．先へ進まないでも，後戻りは行きと同様厄介だ」（三幕四場136—138）に至って完全に彼の足どりは乱れてしまっている．これは森の中にさまよう Jones の足どりと対応する．

この二人が徹底した「悪」であるならば，二人の恐怖や苦悶は生れて来ない．Macbeth は事実罪の決行前からしばしば自分の行わんとする事について反省する．「奴等がおびえて『お助け下さい』というのをきいていながら，わしは『アーメン』とは云えなかった」（二幕二場29—30）．「だが何故『アーメン』と云えなかったのだろう．わしこそお助が最も必要だったのだ．だのに『アーメン』がのどにつかえた」（同，31—33）．そして深い苦悩をくぐりぬけてあの「明日，又明日……」（五幕五場19—28）の諦観に至る．これに対し Jones という男も，アメリカにいた時には「バプテスト教会のれっきとした信者」であったものが，金もうけのために「エスさまもおあずけ」（一場）にしてしまったのである．森の中で幻をみるこの男にその昔の経験がよみがえって来る．第四場ではバプテストの牧師の言葉を想い起して化物の存在を否定しようとし，又，五，六，七場での彼は，必死に「神さま」「エスさま」に哀訴し，慈悲と許しを乞う．併し全ては空しい．唯 Jones には最後まで Macbeth の達したような境地は生れて来ない．Macbeth が語ったような豊かな詩，精神の苦悶の言葉は Jones から

は聞えて来ない．Jones は唯もうおどおどと錯乱したまま，そしておそらくはかすかな叫びだけをあげて死んで行く．彼は死体となって舞台に運ばれて来る．Macbeth の苦しみは終りまで倫理と宗教にかかわる精神的なものである．*The Emperor Jones* もなるほど，そのはじめの方では大いに倫理と宗教に関係がある．Jones の恐怖は倫理にさからった所業から，又「エスさまをおあずけ」にした事から生れて来る．併しその Jones の恐怖は Macbeth の持ったような精神的な高さにおいてではなく，むしろ単なる心理の退行現象として強くあらわれて来る．七場に語る彼の言葉は全て錯乱であり，そこに現われる「宗教」は暗愚な迷信としてしか描かれていない．

彼等は二人とも恐しい幻をみる．Jones のみる幻は全て彼の過去の所業及び彼の種族の経験のそれで，後ほど遠い過去にさかのぼるのに対し，Macbeth のみる幻はそのような形や順序はとっていない．わけても四幕一場に彼のみる，八人の否無限に続くかと思われる王の行列は，Macbeth によって破壊され，やがて逆に Macbeth を破壊する事によって回復される世界の秩序なのである．Jones はそのようなものはみない．この違いは大きい．

唯，二人ともにひどい恐怖にとりつかれている事だけは共通である．それで「この一時間前に死んでいたら，幸福な一生であったろうに……」（二幕三場96以下）とか，「昔は脳味噌がとんで出ると人間は死んでそれきりになったものだ．ところが今は頭に20カ所の致命傷をうけた奴でもたち上って……」（三幕四場78以下）とか，「もう怖しいという味は殆んど忘れた……」（五幕五場9行以下）にそのまま対応する言葉こそ Jones は云ってはいないが，同じ恐怖のどん底におちいっている事はいうまでもない．そして五場での Jones の「おらあほんものの人間なら怖かねえんだ．いくらでもやって来い．だが人間以外のものときちやー」は，Macbeth の「人の敢てする事なら何でもする．すさまじいロシヤ熊の姿，角の生えた犀，ヒル

ケニヤの虎の姿で来るなら来い．その姿さえよしてくれれば，わしのしっかりした筋肉はふるえはしないのだ．……」（三場四場99以下）と対応している．

ところで太鼓の音はどうであろうか．*The Emperor Jones* で第一場の終り頃から鳴りはじめて，Jones の死ぬ時まで鳴りやまぬあのしっこい太鼓の音は．今これと *Macbeth* の「ノック」とを対比させる事は突飛であろうか．*Macbeth* では勿論この「ノック」はあの太鼓のように，劇の中でしっこく鳴り続けはしない．少くともその音は聞えて来ない．併し野心が Macbeth の心にとりつきはじめた頃，彼はこう云っている，「よい事なら何故こんな誘惑がきざしておそろしい幻がみえるのか．それを想うと身の毛がよだって，いつになく心臓が肋骨にぶつかるように鼓動する……」（一幕三場134以下）．そしてこの Macbeth が大罪を犯した直後に，誰の叩くとも知れないノックがはっきり音となって聞えて来る．「何処かで叩いている．俺はどうしたのだ．音のするたびにびくびくしている」（二幕二場57—58）．そしてこの事件の発覚に至るまで，場面はあの有名な門番の場（二幕三場）となっているのである．全く違った二つの音でありながらこれ等の音は，主人公達が今まで知らなかった深淵に意識を埋没させようとする時に聞えて来るのである．何かを追求していた者が，逆に追跡される身に自分の境位を変えようとする時，この太鼓の音もノックも聞えて来るのである．

Jones の劇において，太鼓の音に劣らず重要な意味を荷わせられているものは「銀の弾丸」である．これがこの劇を支える重要な irony の一つとして用いられている事は論をまたない．Jones はかって愚鈍の土人たちから身を守るために，この「銀の弾丸」の迷信をつくりあげた．土人たちには銀の弾丸など，めったに手に入らない事を Jones はちやんと心得ていた．彼はいざという時にはそれで自分の息の根をたつのだと土人達に云いきかせてあった．その故に彼は今日まで無事であった．今ではそれが魔除

けのお守りになっている．これに身の安全を託して彼は森の中にもとびこんだのである．併しこの劇の皮肉は，土人達がおろかにも Jones の言葉を真にうけて，悠々と銀貨をつぶして弾丸をつくり，そしてそれで見事に Jones をうち殺す事である．Le trompeur trompé！正にそれは *Macbeth* における「女の腹から生れた人間」「Birnam の森」である．「残酷に，大胆に，思いきってやるんだ．人間の力など馬鹿々々しい．女から生れた者で誰一人として Macbeth を害し得る者はない」（四幕一場79—81）．「あの大きな Birnam の森が高い Dunsinane の山の方へ Macbeth めがけて攻めかからない内は，Macbeth は決して敗れる事はない」（同，92—94）．Jones が土人に銀の弾丸がつくれない，と信じたと同様，Macbeth も「女の腹から生れた」ものでない人間などいない事，森が動くはずがない，という事を信じた．併し意外や終局で使者は「丘の上で見張りをつとめておりまして，Birnam の方を見やりました所，見るや否や，森が動きだしました……」（五幕五場33—35）と告げ，更に Macduff は Macbeth と死闘の折，「Macduff は母の腹をさいて，生れぬ先に出て来たのだ」（五幕八場13—14）というおどろくべき言葉を Macbeth にあびせかける．Macbeth は此所で完全にがっくり参ってしまう．「おれにそんなことをいうその舌は呪われてあれ，その言葉がわしの勇気をくじいてしもうた．あのうそつきの悪魔め，もう信じないぞ．二重の意味でだましおった．おれの耳には約束を守るとみせかけ，わしの希望にはそれを破った．……」（五幕八場17—22）．併し時すでにおそかった．闇の手先共は小さな真実で人をいざないこんでおいてもっともっと大切な事でその人間を裏切ってしまう（一幕三場122以下参照）．人間のあさはかな常識からみてあり得ないと思われた事が，最後になって実現してしまったのである．此所で Macbeth のはかない一生は終る．

もう一つの事をつけ加えよう．

「生きながらえて世間のみせ物になれ，おれ達は貴様の姿を珍らしい怪

物のように，棒の先に描かして，その下に書いてやる『これが僭王のなれのはてだ』」と Macduff は云う（五幕八場24—27）．“the show and gaze o' the time” になれとは何という皮肉な言葉か．Lady Macbeth ははじめの頃「世間をいつわるため，世間並の顔をなさいませ」“To beguile the time, Look like the time;”（一幕五場64—65）と云っていたのであり，Macbeth も「何くわぬ顔をして人目をあざむこう．いつわりの顔はいつわり心の知るものをかくさねばならぬ」“..... mock the time with fairest show: False face must hide what the false heart doth know.”（一幕七場81—82）としらをきって世間をおしわたるつもりなのであった．併し結果として the show と the time の関係は全く逆転してしまった．Jones においても事は同じである．第一場，森の外の宮殿における Jones の豪語と，二場以後の森の中での Jones の錯乱も又同じくきわめて皮肉な対照をなしている．「皇帝陛下よ，お前の偉そうな勿体ぶった風はどうしたんだい，え？ 銀の弾丸か！ へっ，とにかく，お前も，立派な往生をとげたもんさ！」Jones の骸に叩きつけられた，Smithers のこの言葉を以ってこの作品は終る．

*

筆者が *Macbeth* と *The Emperor Jones* を対比して見出した相似点は上の通りである．全くよく似た所の多い作品である．併しこれ等の相似点が逆にこれ等二つの作品の異質さを顕著にさせている．*Mourning Becomes Electra* が Aeschylus の三部作に忠実にもとずき乍ら，結果として甚だ異質な作品となったように，*The Emperor Jones* は *Macbeth* と異質である．筋立てからが少しは異っている事は勿論，細部の相異まであげればきりもない．併し中でも重要な事実は，Elizabeth 朝舞台にかけられた Shakespeare の作品の方は「王国を主題とする雄大な芝居」“the swelling act of the imperial theme”（一幕三場128—129）であったに対し，現代アメリカの表現主義戯曲の模範とみなされる O'neill の作品は，「王国を主

題」ともせず，小さい家庭の背景すらなく，その中核は唯かぼそいmono-drama である事である．同時に *Macbeth* にあった詩は姿をけし，代って一黒人のみだれたリズムの野蛮ななまの言葉と絶叫がとって代る．そして *Macbeth* の結ばれる局面は「めでたい大平の天下」"The time is free"（五幕八場55）であったのに対し，*The Emperor Jones* には終りまで free な time はない．むしろ Jones が死に，この作品が土人の勝利を以って終る時にも，それのあたえる印象はこの劇の最後をしめくくる Smithers の気持のようにわれきれない．time は依然として「関節が外れた」"out of joint"（*Hamlet* 一幕五場189）ままなのである．

附記—本稿を書き終え，それが印刷にまわった後で入手した Oscar Cargill, N. Bryllion Fagin, William J. Fisher edd, *O'Neill and his Plays* (New York University Press, 1961) におさめられた Julius Bab, 'As Europe Sees America's Foremost Playwright' (Theatre Guild Magazine, November 1931 より転載) 中にすでに *Macbeth* と *The Emperor Jones* の相似性が指摘されてある事を知った．その部分はこう書かれている．

'……This Negro is only an insolent tyrant in a Caribbean island; yet the collapse of his criminal egomania, the defeat of his extraordinary vitality by the imaginings of his own brain—these are represented so magnificently, so movingly, that the play seems to me to offer a complete parallel with Shakespeare's *Macbeth*. I believe that one need only see *The Emperor Jones* once played by an actor of the first rank to feel that this comparison is by no means too bold; both plays deal with the downfall of a powerful man who has lived beyond his strength; the end of a despot' (p. 350).